

港を核とした地域活性化と賑わいづくりの創出

～飛躍するやっちょろ～



のぐちひろゆき
野口博之*

世界に開かれた八代港を有する八代市、時代の変化に対応しながら施策を展開していく中、港を核とした地域活性化と賑わいづくりの取り組みについて紹介する。

1. はじめに

世界に開くゲートウェイ「八代港」を有する八代市は、時代の変化に対応した施策を展開し、スピーディーで切れ目のない物流環境の実現や産業競争力向上への支援、加えて、「港」を核とした地域づくりや、大規模災害に対する備え、港湾機能の拡充への支援など、様々な取組を積極的に推進している。

本稿は、それらの内、みなとオアシス八代（既存インフラ）、地域資源、歴史・文化など、港を核とした地域活性化と賑わいづくりについて紹介する。

2. 飛躍するやっちょろ（正式には「やつしろ」）

八代港は、熊本県の南西部、八代海に注ぐ球磨川の河口に位置し、古くから球磨川を利用した物資輸送の拠点として栄え、県南地域の発展に大きな役割を果たしてきた。明治以降も物流拠点として近代的な港湾整備が進められ、八代市は南九州随一の工業都市へと発展した。

また、海の玄関口である八代港は、平成29年に過去最多となる年間66回（全国でベスト10）のクルーズ船が寄港し、令和2年3月にはくまモンポート八代（国際クルーズ拠点）が完成した。クルーズ船が寄港した際には、地域の方々が歓迎イベントを行うなど、国内外の観光客と地域の方々との交流の場となっている。

1) みなとオアシス八代誕生「ビッグくまモンがお出迎え」

新たな観光スポット「くまモンポート八代」には、普段から市民や観光客が楽しめる場所がたくさんあり、間近でクルーズ客船を見ることが出来るのはもちろん、販売エリアで地元グルメを楽しんだり、特産品を購入したり、多目的芝生広場で海を見ながらゆっくり休憩もできる心地よい空間となっている。

また、全国的に知られるご当地キャラクター「くまモン」をテーマにした高さ6mのビッグくまモンや54体（肥後54万石とリンク）のくまモン合唱隊が訪れる人たちをお出迎えしており、緑豊かな日本庭園や竹林なども含め、こちらも市民や観光客が楽しめる施設となっている。

そんな中、コロナ禍で延期となっていたが、令和3年7月31日、みなとオアシス八代登録証交付式が関係者約30人の出席のもと、くまモンポート八代で開催された。

みなとオアシスは、みなとを核としたまちづくりを促進するため、住民参加による地域振興の取り組みが継続的に行われる施設を国土交通省港湾局長が登録するもので、八代の登録は、全国で151カ所目、九州管内で22カ所目、熊本県内で3カ所目（平成23年牛深港、平成30年富岡港、令和3年八代港）となる。

登録された施設は、旅客ターミナル、くまモンポー

*くまモンポート八代・クルーズ活性化協議会 部会長（みなとオアシス部会）
（八代市 経済文化交流部 次長）

ト八代、舟出浮き乗船場、三ツ島（無人島）、エコエイトやつしろ緑地広場など6つの構成となっている。

構成施設の1つである「三ツ島」（無人島）では、八代海の伝統漁法を間近で見学し、とれたての新鮮な海の幸を堪能できる体験型観光「舟出浮き^{*}」を楽しむことができる。また、八代港で毎年開催される「みなと八代フェスティバル」は、海上自衛隊や海上保安庁の艦船、港湾周辺の立地企業の協力により、さまざまな展示や船による体験航海・クルージングが行われ、子供から大人まで海や港に親しめる多彩な催しが行われている。



写真-1 上空から見た八代港、みなとオアシス八代



写真-2 くまモンポート八代の全景



写真-3 高さ6mのビッグくまモンと記念撮影する親子連れ

本市としては、令和2年に官民一体となり、くまモンポート八代・クルーズ活性化協議会を立ち上げ、新たな観光スポット「くまモンポート八代」を

活用した「八代地域ならではのクルーズ船受入環境の充実」を図るとともに、「くまモンポート八代を核とした賑わいの創出」に向け、より一層の発展に努めているところである。

今回の登録を契機に、今後、くまモンポート八代を中心に港や海岸を活用したイベントなどが開催され、観光拠点としての機能が高まるとともに、地域住民の交流や観光振興を通じた地域活性化の拡大につながることが期待される。

また、コロナ禍が収束した暁には、令和2年3月完成した新たな岸壁に、約5,000人が乗船する大型クルーズ船が多数着岸することになり、寄港にあわせて、地元の方々が歓迎イベントを行うなど、更なるにぎわい創出になる。

2) 国際クルーズ拠点と世界に誇る遺産の宝庫「八代市民俗伝統芸能伝承館、日本遺産との連動」

本市では、前述の国際クルーズ拠点「くまモンポート八代」と連動し、インバウンド需要にも対応できるまちづくりの強化を図っている。

毎年11月23日に開催される「八代妙見祭」は九州三大祭りの一つに数えられ、平成23年に国の重要無形民俗文化財の指定を受け、平成28年には、「京都祇園祭の山鉦行事」や「博多祇園山笠行事」など全国32の祭りとともに「山・鉦・屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に登録された。380年余りの歴史を持ち、神輿や豪華絢爛な笠鉦、勇壮な獅子舞、亀と蛇が合体した想像上の動物である亀蛇（通称：ガメ）など40の出し物、約1,700人が参加し、6kmの道のりを練り歩く。県内はもとより、九州内外から20万人を超える観光客が訪れる熊本県を代表する祭礼行事である。

この八代妙見祭をはじめ、市内各地の無形民俗文化財の保存継承と交流促進を目指した情報発信拠点となる「お祭りのでんでん館（八代市民族伝統芸能伝承館）」が令和3年7月、開館となった。文化遺産を活かした新たな観光戦略の一つとして、国内観光客に加え、外国クルーズ船寄港に伴うインバウンド需要を取り込むための重要な役割を担う施設になるものと期待されている。

また、令和2年6月19日、八代市に残るめがね

橋や干拓樋門など、石造りの文化に関する構成文化財24件を物語（ストーリー）として紡いだ「八代を創造（たがや）した石工たちの軌跡～石工の郷に息づく石造りのレガシー～」が、日本遺産に認定されている。



写真-4 八代市産材を活用したお祭りでんでん館（八代市民族伝統芸能伝承館）



写真-5 八代市に残るめがね橋などの日本遺産（笠松橋）

3) 防災拠点として重要な八代港「熊本県内初の耐震強化岸壁」

平成28年4月16日に発生した熊本地震において、発災直後より、八代港の岸壁に海上自衛隊の艦船、海上保安庁の巡視船が係留し、災害支援活動が行われた。

当時、八代港には耐震強化岸壁がなく、更に強い地震が発生した場合、使用できる岸壁が全くなく、緊急物資搬送が出来ない可能性も否めなかった。

近年、八代市を震源とする震度6強の地震（日奈久断層）が想定される中、令和2年3月、県内で初となる「耐震強化岸壁」や「くまモンポート八代」が整備され、コロナ禍で延期となっていたが、令和3年7月21日、くまモンポート八代で、国土交通省、九州地方整備局、第十管区海上保安本部、熊本県、県港湾建設協会、本市による震度6強の地震が発生した場合を想定した合同防災訓練が行われた。

近年の未曾有の災害に迅速に対応するためにも今

回のような訓練を継続的に実施することは大きな意味があり、くまモンポート八代を有するみなとオアシス八代が人流・物流の拠点並びに防災拠点として、今後さらに飛躍していくことが期待される。



写真-6 有事への備え、八代港合同防災訓練（令和3年7月21日）

3. おわりに

本市は、熊本地震、新型コロナウイルス感染症、そして令和2年7月豪雨災害と、トリプルパンチに見舞われた。そのような中、米中貿易摩擦、日韓関係悪化による冷え込みなどにも関わらず、八代港と台湾を結ぶ県内初の国際コンテナ定期航路の就航が決定し、八代港の国際コンテナ航路は週4便になった。

さらに、前述のとおり、国際クルーズ拠点「くまモンポート八代」が国土交通省より、「みなとオアシス八代」として登録されることにより、今後ますます南九州地域の国際物流拠点のみならず、人流拠点としても、更なる発展が期待される。

また、クルーズ専用岸壁の一部は、熊本県内初の耐震強化岸壁として整備され、災害時には救護物資等の補給基地として利用可能となり、地域の防災機能の強化にもつながる。

このように本市が持つ恵まれた港湾の既存インフラを含む地域資源や歴史・文化を全国・世界へ発信し、本市の地域活性化、賑わいづくりをより加速できればと改めて思うところである。

【用語解説】

※舟出浮き：約350年前のお殿様が鉾突きという漁法で遊んだ舟遊びが始まり。

現在の「八代舟出浮き」は漁師さんと一緒に漁船に乗り込み、八代海の伝統漁法を間近で見学し、獲れたての海の幸（イカ、エビ、カニ、チヌ等）に触れ、三ツ島（無人島）でお好みのままに食事する八代の海のレジャーのこと。「出浮き」とは海のピクニックという意味。

【著者紹介】 野口 博之（のぐち ひろゆき）

平成元年熊本大学工学部土木学科卒。港湾、海岸、防災等の職種に従事。九州地方整備局港湾空港部港湾計画課長補佐を経て現職。